

1966年のキュックリヒ先生の松山での講演記録

キュックリヒ先生は1966年9月、愛媛県の松山に出張され、新設されたばかりの松山東雲短期大学保育科と松山城南高等学校で講演を行いました。松山東雲短期大学での講演の記録は残っていませんが、松山城南高等学校での講演の記録は、同校新聞部発行の『松山城南新聞』に掲載されていました。

松山城南高等学校（現在、松山学院高騰学校）は、1891年1月アメリカン・ボードから派遣されたコーネリア・ジャジソン女史と西村清雄校長が松山市三番町に「普通夜学会」を創立したことに遡る教育機関で、講演中に言及されている初代校長西村氏は、その年の12月に亡くなっています。

内容は以下の通りです。

キュックリヒ女史を迎えて

爽やかな秋晴れの九月二十一日新装なった本校講堂に、キュックリヒ女子をお迎えしてお話をきいた。全校生徒職員と朝の礼拝を共に捧げ、続いて講演にはいる。演題は「光の人」。

まず驚いた。日本人もおよばない流暢な日本語。標準語である。進むにつれて、言葉言葉に盛られた愛のわがが坦々と、湧く泉のように一人一人の心に浸みこむ。終わって時刻に気づいたら、一時間余を経ている。この間をわれを忘れて過ごしたのだ。そして思った。げにも、女史そのものが、「光の人」であり、感銘はそこからくるのだ——と。

女子は、ドイツの教育大学の出身。父君は自由派のドイツ教区長の要職にあられるという。

許婚の夫は、第一次世界大戦に学徒の身で応召を受け、僅かにその三日の後に、若く美しい魂をドイツに、また彼女のために捧げられた。それが彼女の社会への生涯の献身の機会であったようである。

日本に渡来し、釜ヶ崎の社会福祉施設などに福音の奉仕をされていたが、再び大戦勃発のため、本国からの資金の仕送りがきれた。そこで日本在住のドイツ領事館につとめて、あの難解のやかましい日本官報の翻訳に従事されたという。

東京の戦災で、女史の両親の写真が焼かれた悲しみは、今度は、親のない子への献身へと決意されそれを実行に移された。その祈りに応え、女史の人格にうたれて私財を献ずるよき後援者を得たことが現在の愛泉寮を埼玉県に実現させたのである。浮浪児、身寄りなき者、引取りてのない孤児、身心不自由者等それらの人の光となり、六十余人の教師の中心となって神の愛を実践しておられる。

その在日四十三年の間には、全く馬鈴薯とパンという切り詰めた食生活で、只管、天に宝をつむ喜びに生きられた時代を経られたという。げにも「光の人」である。

(お話の中から摘記)

「一六才から一八才の五人の少年、どうにも手に負えず、愛泉寮から埼玉学院へ送る前、そのおり「神から預かった若い魂を牧するよき羊飼い」ではなかった自分を神に祈った。祈に応え五人の者の悔心と改心が与えられたのである。

ヒロシはディーンエージャーのせむしの子である。薄汚いその子を皆が嫌い、ボイコットした。ママが寮生にこの問題を投げかけた。ある年上の子が自分の部屋の自分のベッドの提供を申し出た。

マサハルの誕生日の祝に玩具の自動車を貰った。ノボルが欲しがった。マサハルは彼にそれを貸し与えた。彼はその日天に召された。マサハルの自動車にのって天への旅に立ったのである。

グループになると集団で悪を行う傾向。一人一人が個人的勇気に生き、われは責任ある神の愛し給う一人なりといえる人になれ。偉大な事は男でなければできない。男にはできる。牧者は男、視力三米程の弱い羊の群れを誤たず導き飼う者は男である。女にはおしゃべりの鷺鳥飼位が適している。

日本では百才以上の老人は二五四人いるという。そのうち男はわずかに四九人女が二〇六人。女の方が断然優れている。何でもできるのは男子である。その未来のために、若い今の時代にそれを心得て、準備せよ。今は精いっぱい学んで下さい。がまん、慎しみ、責任を知る。光の人のごとく今から歩まれよ。神の助けが必ず加わるでしょう。

西村先生によって創られたこの学校は世の光である。光の学校に学ぶ皆さん、尊敬する男たるみなさん。起ちあがって下さい。若い光、若い羊飼いを渴望している日本のため、内的光をうちに積んで下さい。」と物静かに、結ばれたのである。(宮内記)」

(今日不適切とされる表現も散見され、キュックリヒ先生の経歴の紹介に誤りがありますが、資料として原文をそのまま掲載しました。)

『松山城南新聞』は、欄外には英語名があり、JONAN TIMES とあり、発行日は昭和 41 年 10 月 10 日とあります。発行所は松山城南新聞部、松山市永目町 TEL②7288 ③5719、印刷はクボタ印刷 KK TEL②2382、となっています。